梁の文學集團と個人(二)

――吳均について――

森野繁夫

一

いったい詩とは、自分の身の上におこった事柄、それは社會における、また自分の屬する集團における事柄を背景にするものであるが、それによってひきおこされた感情の動きが、その時々の自然環境の狀態と融合して吟詠されたものと考えてよかろうかと思う。中國においては「詩經」以來、漢魏に至るまで、感情を誘發される對象に、またその表現方法に、その時々においていささかの變化はあったにしろ、胸中にわきおこった感情を、自分の周圍の物事に制約されることなく自由に表現してきたように思われる。したがってそこには、あふれる個性と、讀む者の心に訴えるものがあった。

ところが六朝となり、それも齊梁になると、何故か感情はありのままには表現されなくなる。すなわち齊梁においては、心にどのような苦惱、悲哀があろうとも、それをそのまま吐露したものは美しいものとは意識されず、したがって文學とは考えられていなかったもののようであり、どの作品を見ても感情的に切迫したものは感じられず、ただ穩やかに、ゆったりと落ちついている。

心靈を感動させるような事柄が、それらの人々の身の上にはあまりおきなかったのかもしれない、とも考えてみる。しかしよほど惠まれた人でないかぎり、それも不安定な時代であった六朝後期において、そのようなことはあり得ないことであろう。やはりそれは、當時の人々の、詩というもの文學というものに對する意識に問題があったとしなければなるまい。

そのようなわけで私は、時の中央文壇、つまり貴族のサロンにおいては、人間の世界における生々しいできごと、及びそれに本づく感情を、露わに表現することは、文學としてはあまりに度ぎつく趣きのないこととされていた、つまり文學、詩に對する感覺が、前代とは異ってきていたものであろうと考えるのである。

その原因を私なりに考えてみるに、文學というものが個人的なものから集團的なものに變化してきたことにあるのではないかと思う。詩は漢代においては、個々人の感情を表現するものとして、つまり「個人の文學」として作られていた。それが後漢も末になると、建安の文學に見られるように、文人集團の中で次第に社交的な性格を帶びてくる。しかしながらそれは「文心雕龍」明詩篇に、「慷慨　以て氣に任せ、磊落　以て才を使(ほしいまま)にす。」と評されるように、まだ個性のほとばしりの見られる文學であった。しかし文學の集團化がさらに進み、

各地に宗室の人々を中心とする文學集團が形成され、詩の社交的性格がますます強くなつた齊梁ともなると、文人たちは、それぞれ文學集團に所屬し、その社交的、遊戯的な雰圍氣の中にあって、個性の表出を忘れ、集團的な制作に從事するようになる。

貴族社會における文學集團にあっては、深刻で生々しい感情の表現は、文學の範疇には入らなかったのであろう。煩らわしい俗事から脱け出して、ゆったりとした雰圍氣の中で、集團における、或は集團に近い場所における事柄、自然、品物を詠じた、美しく綺麗な詩こそ、彼等にとっては文學とよべるものであった。そうしてこのように、切迫した感情、激しく搖れ動く感情の表現が爲されなくなり、穏やかなゆったりした氣分の詩が多くなった、言いかえれば、激しい個性の表出が影をひそめてきたことの背後には、「個人の文學」から「集團の文學」への變遷ということが、その原因としてあったように思うわけである。

このように、都の人士の綴る詩は、そこに盛られた感情はゆるやかで感傷的であり、激しく搖れ動く感情が詠われることは稀であった。しかし、そのような中にあって、自己の置かれた境遇に惱み苦しみ悲嘆し、その抑えきれない感情を詩に詠み込んだ詩人として、何遜と吳均とを擧げることができる。いずれも志が遂げられない、つまり不遇ということが、その時流に拘われない新鮮な感覺とあいまって、感情をありのままに吟詠するという、本來そうあるべきものでありながら、當時あまり行われなかった事柄を、二人にさせたのであろう。

何遜の場合については既に述べたので、此の度は吳均について、その「個人の文學」の在り方を見てみようと思う。その作品が激しく搖れ動く感情の記錄であることに間違いはないが、それがどの方向に、どのような表われ方をしているか、その點を中心として、何遜の場合と比較しながら檢討してゆくことにする。

二

吳均の傳記は「梁書」および「南史」の文學傳に收められているが、それぞれ二二八字、三七七字の小傳であり、それは何遜の場合とほぼ等しい。その傳記によれば、先ず吳均の出自が述べられるが、そこには父祖の名は記されておらず、ただ

吳均、字は叔庠。吳興、故鄣の人なり。家は世〻寒賤なり。

とあるだけである。

何遜の場合も、あまり家柄は良くなかったが、それでも祖父の名、父の名は記されていた。祖父、父の名の記されていない吳均の家柄は、したがって、何遜と比べてもはるかに低く、完全なる寒族であったといえよう。ということは、彼が世に出るためには何遜以上の苦勞がその身におおいかぶさってきたであろうことを示している。

齊の後半、吳均二十代の或る年のものと思われる「初めて壽春に至りて作る」詩には、誰ひとりとして賴る者のいない寒族の心細さが、次のように述べられている。

桓譚不賣交　桓譚は交りを賣らず
馮子任紆直　馮子は紆直に任す
浮溺逐波影　浮きつ溺みつ波影を逐い
飄揚恣風力　飄い揚がりて風力に恣す
北州少知舊　北州に知舊は少く
南陽寡相識　南陽に相識は寡し
中駕每傾輪　駕するに中りては每に輪を傾け

當騫復摧翼　騫ぶに當りては復た翼を摧く
望美無津梁　美を望むも津と梁と無し
私自憐何極　私かに自ら憐みて何の極りかあらん

「桓譚は利のために友を賈るようなことはせず、馮衍は曲ろうが眞直ぐであろうが成りゆき任せ、浮きつ沈みつ波に漂うように、風のまにまに空を漂うように、生きていった——」。吳均はこのように、榮達に心を向けることなく自由に生きた後漢の桓譚、馮衍に心をひかれながらも、自分が現在おかれている不遇な狀態について詠う。「自分には北の州にも、ここ南陽の地にも識り人とてなく、したがって、車に駕して官界にのり出そうとするたびに傾覆えってしまい、飛び立たんとしては復た翼を摧いてしまう」。出世の手がかりをつかもうとするたびに、知人、庇護者のいないために失敗してしまうのである。「いくら官途を望んでも、津も梁も無いからにはどうしようもない。爲すすべの無い我が身の不幸を、何時までも憐れむことである」。

北にも南にも、津梁となってくれる知人のいない寂しさ心細さは、立身のためには名士の推薦が是非とも必要であった當時にあっては、切實なものであったろう。その嘆きは、寒賤な家柄に生まれた人々にとって共通のものであった。それらいわゆる寒族の士たちは、官途につくためにはどうしても當路の人に知られ、引きあげてもらわなくてはならなかった。したがって立身を願う世の寒士たちは、必死になって庇護者を求めたのである。

吳均の場合、その生涯の庇護者は、後に述べる柳惲であったが、それは梁になってからのことで、それ以前、つまり齊の後半、吳均の二十代においては、「王桂陽」という人物が、吳均のねらいをつけた庇護者として存在したことが、吳均の詩から知られる。「王桂陽」というのは、齊の桂陽の太守王嶸のことであり、吳均は多分、時に桂陽郡丞の地位にあった友人周興嗣の紹介によってであろう、その側に接近している。吳均の「王桂陽に贈りて別る」三首と「王桂陽に贈る」一首には、その願いである求官の意が、寒族の歎きとともに述べられている。今、その中から「王桂陽に贈る」一首をあげる。

松生數寸時　松の生じて數寸の時
遂爲草所沒　遂に草の沒する所と爲る
未見籠雲心　未だ籠雲の心を見わさず
誰知負霜骨　誰か知らん負霜の骨
弱幹可摧殘　弱き幹は摧殘わる可く
纖莖易凌忽　纖き莖は凌忽られ易し
何當數千尺　何ぞ當に數千尺となりて
爲君覆明月　君の爲に明月を覆うべき

「松の生じて數寸の時、遂に草の沒する所と爲る。未だ籠雲の心を見わさず、誰か知らん負霜の骨」。しかしながら今はまだ「弱き幹は摧殘わる可く、纖き莖は凌忽られ易」き狀態であり、このままでは「何ぞ當に數千尺となりて、君の爲に明月を覆うべき」。是非とも王桂陽どののお力添えが願わしく……と、吳均は訴える。

この「王桂陽に贈る」詩では、求官の意ばかりが強いが、「王桂陽に贈りて別る」詩の方には、「紛紛れる巫山の石、合沓せる洞庭の瀾。行衣は曉の露に侵れ、征舫は夜の湍に犯さる。」「樹の響きは山を浹りて來り、猿の聲は岫を繞りて急なり。旅帆は風に飄揚り、行巾は露に沾濕う。深き浪は蒹葭に闇く、濃き雲は城邑を沒す。」のように、寒族の悲哀を移入したような暗い自然の風景が詠われている。

このような吳均の願いが、どのような結果となってあらわれたか、

今では知ることもできないが、この時期、つまり齊末における二十代の吳均は、「世〻寒賤」なる地位からはいあがるために、懸命の努力を續けていたようである。

その「好學俊才」にものをいわせて、必死に賣りこみを續けた結果であろうか、時の文壇の大御所である沈約に、その文を稱賞されたこともあったと、その傳には記されている。このように都の文壇において、いささか名を知られるようになった吳均は、中央文壇の、沈約とは違った意味での中心人物、任昉にもはたらきかけている。「任黃門に贈る」と題する詩によって、そのことは知られるのであるが、その時期は「黃門」とあるから、任昉が黃門侍郎であった梁初天監元年502のことと思われる。時に任昉は「昉、士大夫の間に立つや、汲引する所多し。已に善くする者あらば、則ち其の聲名を厚くす。」（梁書、任昉傳）また「其の門に遊ぶ者は、昉　必ず相い薦達す。」（梁書、裴子野傳）という記事から知られるように、文壇のボス的存在であった。

贈任黃門（任黃門に贈る）

その一

相如體英彥　相如は英彥を體し
左右生容輝　左右には容輝を生ず
已紆漢帝組　已に漢帝の組を紆び
復解梁王衣　復た梁王の衣を解く
經過雲母扇　雲母の扇を經過し
出入千門扉　千門の扉に出入す
連州茂芳杜　連なれる州には芳杜茂り
長山鬱翠微　長き山には翠微鬱たり
欲言終未敢　言わんと欲するも終に未だ敢てせず
徒然獨依依　徒然として獨り依依たり

吳均にとって司馬相如は憧れのまとであった。その文才によって、漢帝と梁王の側に侍った相如、自分もあの相如のように中央の文壇で活躍したい、とは思うものの、事は簡單には運ばない。吳均はそこで「言わんと欲するも終に未だ敢てせず、徒然として獨り依依たり。」そのような願いを口に出せないまま、何も手につかず獨り思い惱んでいる私です。と、言外に攀援の意を託す。

その二

紛吾少馳騁　紛として吾は馳騁する少く
自來乏名德　自來　名德に乏し
白玉鏤衢鞍　白玉と鏤衢の鞍
黃金瑪瑙勒　黃金と瑪瑙の勒
射雕靈丘下　雕を靈丘の下に射
驅馬雁門北　馬を雁門の北に驅る
殷勤盡日華　殷勤に日の華を盡し
留連窮景黑　留連して景の黑を窮む
歲暮竟無成　歲暮れて竟に成る無し
憂來坐默默　憂いの來りて坐して默默たり

「事にとり紛れてしまって、功名を立てようと努めることを怠った私は、以來、當然のことながら名德には惠まれない。そのため私は、白玉と鏤衢の鞍と、黃金と瑪瑙の勒をつけた馬にまたがり、北邊の地である靈丘の下で雕を射たり、雁門の北を馬で驅けまわったりして、その日その日を心ゆくまで樂しみつくしておりました。しかしこの年になるまで、結局なすところなく、今や慘めなわが身を思って深い憂いにおそわれ、じっとふさぎこむこの頃です。」――このように詠う此の

作にも、呉均の攀援の意は明らかにうかがえよう。

呉均のこのような懇願は、天監二年に至ってようやくかなえられた。呉興郡の太守として赴任する柳惲に召されて、その主簿に補されることになったのである。それは呉均が三十四歳の時であった。呉均にとって呉興は父祖の地である。或は呉興の事情に詳しい點を買われたのかも知れないが、そんなことは呉均にとってはどうでもよいこと、とにもかくにも官界に一歩をふみ出すことができたのである。

呉興において柳惲は、「日に（呉均を）引きて與に詩を賦」している。（梁書、南史・呉均傳）。以後、呉均は、何遜がその文才によって范雲の知遇を得たのと同様に、柳惲の、直接あるいは間接の庇護の下に、その文學活動を續けてゆくことになる。ただ何遜が、梁の天監二年、これからという時に范雲に死なれ、將來の榮達に大きな影響を受けたのに比べて、呉均の場合はかなり後まで、すなわち柳惲の亡くなる天監十七年まで、その庇護の下にあったようである。その點、何遜に比べて惠まれていたということはいえよう。

柳惲は時の政界・文壇において、范雲ほどの力は持っていなかったが、それでも呉均ひとりを中央文壇に近づけるくらいのことは、容易にできた。「梁書」柳惲傳によって、そのだいたいの經歴をうかがうに、齊にあっては竟陵王子良の法曹行參軍から、太子洗馬驃騎從事中郎となり、齊末には、蕭衍（後の梁の武帝）の下にあって冠軍將軍征東府司馬、さらに相國右司馬となり、梁の天監元年には長史兼侍中、二年に呉興太守、六年に散騎常侍、ついで左民尚書、八年に廣州刺史となり、また中央に徵還されて祕書監領左軍將軍となり、その後、復び呉興太守となって善政を布き、天監十七年に五十三歳で亡くなっている。その人柄と文才については、「梁書」本傳によると、次のように記されている。

惲は、立行　貞素にして、貴公子を以て早に令名あり。少くして篇什に工みにして、始めて詩を爲りて曰く「皐の亭に木の葉は下ち、隴の首に秋の雲は飛ぶ。」琅邪の王元長、見て嗟賞し、因て齋の壁に書す。是に至りて、曲宴に預れば必ず詔を被りて詩を賦す。嘗て高祖の「登景陽樓中篇」に奉和して云う「太液に滄き波は起り、長楊には高樹の秋。翠華は漢を承けて遠く、雕輦は風を逐いて遊ぶ。」深く高祖の美むる所と爲り、當時、咸な共に稱し傳う。

このように柳惲は、齊から梁にかけて、中央文壇において活躍した人物であった。

「世〻寒賤」の家柄でありながら、このような貴公子柳惲の知遇を得たということは、呉均にとって感激に堪えぬことであったろう。自己の能力を認められることの少なかったその生涯において、柳惲の示してくれた理解と好意とは、終生わすれることのできないものであったと思う。以來、呉均は、柳惲の恩義に感じ生涯にわたって報恩の念を懷きつづけ、それは、後に述べるように、彼の詩の內容的特徵を形づくるまでになっている。

後のことであるが、「南史」の呉均傳によれば、柳惲は呉均を臨川王宏に推薦している。そうしてその推薦は、やがて、中央文壇の中心である高祖武帝の坐に呉均を侍らせる機緣となるものであった。

（柳惲）之を臨川靖惠王に薦む。王は之を武帝に稱す。卽日　召し入れ、詩を賦せしめて焉を悅ぶ。待詔　著作となり、奉朝請に累遷す。

このあたりの記事は「梁書」と少し異るが、いずれにしても呉均は、柳惲の推薦がもとになって、念願の中央文壇、それも高祖の宴坐に侍

ることになるのである。柳惲に對する報恩の念は更に強まったことであろう。吳均がその詩で報恩を詠う時、その念頭には常に柳惲の姿が浮かんでいたに違いない。

柳惲に關する吳均の作品としては、今日、次のような諸篇が殘っている。

柳惲と相い贈答す（六首）
柳惲に答う
柳吳興の「何山の集にて劉餘杭を送る」に同す
柳吳興の「烏亭に柳舍人を送る」に同す
柳吳興を竹亭の集にて送る
柳祕書に贈る
柳吳興を道中に迎う

一方、柳惲にも「吳均に贈る」三首、「吳均に贈る」二首がある。今これらの中から、柳惲の「吳均に贈る」三首の一と、それに答えた吳均の「柳惲に答う」詩をあげてみよう。

贈吳均（吳均に贈る）

夕宿飛狐關　夕に飛狐の關に宿り
晨登磧礫坂　晨に磧礫の坂を登る
形爲戎馬倦　形は戎馬の爲に倦むも
思逐征旗遠　思は征旗を逐いて遠し
邊城秋霰來　邊城に秋霰は來れ
寒鄉春風晚　寒き鄉に春風は晩し
始信隴雪輕　始めて信ず　隴の雪の輕きを
漸覺寒雲卷　漸く覺る　寒雲の卷くを
徭役命所當　徭役は命の當つる所
念子加餐飯　子の餐飯を加えんことを念う

答柳惲（柳惲に答う）

清晨發隴西　清晨に隴西を發し
日暮飛狐谷　日暮には飛狐の谷
秋月照層嶺　秋の月は層き嶺を照らし
寒風掃高木　寒風は高き木を掃う
霧露夜侵衣　霧露は夜に衣を侵し
關山曉催軸　關山は曉に軸を催す
君去欲何之　君去りて何くに之かんと欲する
參差間原陸　參差として原陸に間てらる
一見終無緣　一たび見えんとするも終に緣る無し
懷悲空滿目　悲しみを懷きて空しく目に滿つ

吳均はこのように柳惲に愛接され、心に報恩を誓う。しかしながら吳均は、いつまでもその下に安住しているわけにはゆかなかった。その文名が世に現われてくるにつれて、[2]彼の、中央文壇および政界に進出しようという野望が、胸の中に果てしなく廣がっていったからである。その頃のことであろうか、「南史」吳均傳には次のような事柄が記されている。

均　嘗て意を得ず、惲に詩を贈りて去る。之を久しくして復た來るに、惲は之を遇すること故の如く、之を憾まず。

吳均の中央文壇・政界に進出しようという野望は、柳惲の變らぬ恩顧によって、次第に實現されていった。すなわち柳惲の推薦によってのことと思われるが、吳均は天監六年に揚州刺史建安王偉に拔擢されて兼記室となり、文翰を掌るようになる。その揚州の藩府には、奉朝請から建安王府の水曹行參軍兼記室に遷ってきた何遜がいた。吳均と何

遜はそれまでに、お互いの存在を知っていたに違いないが、同じ王府に勤務するのはこれが最初であったろう。その後この二人は、どういう風の吹きまわしか、下づみの知識人として同じような道をたどり不遇な生涯を送ることになる。

すなわち、天監九年に建安王が江州刺史に遷ると、吳均はその下で補國侍郎となって府城局を兼ね、何遜は書記を掌る。また天監十三年頃には、吳均は中央に遷って奉朝請となり、何遜もやはり中央に還って安成王府の參軍事となり、尙書水部郎を兼ねている。つまり吳均と何遜とは、そろって中央に還り、憧れの高祖の宴坐に侍るようになったのである。吳均のこの時の感激は察するに餘りがあるが、しかしそれは長くは續かなかった。「南史」の何遜傳には次のように記している。

南平王（建安王偉は後に南平王となる）後に之を武帝に薦む。吳均と俱に進倖せらるも、後　稍く意を失う。帝曰く「吳均は不均、何遜は不遜。未だ吾に朱昇あるに若かず。信に則ち異なれり。」是より疎隔され、復た見ゆるを得ること希なり。

吳均は何遜とともに、建安王の推薦によって高祖の宴坐に侍るようになったものの、やがて高祖の不興を買い、召されることも希になってしまったのである。その原因について、何遜の場合には、家柄がそれほど良くなく、したがって庇護者も少かったことと、頑固で融通のきかない性格が宮廷詩人として不適格であったことをあげることができるが、吳均の場合はどうであったろう。「世〻寒賤」といわれる家柄の悪さが、その主な原因であろうと推測はされるが、ただそれだけではあるまい。例えば「吳均は不均」という高祖の言葉の意味するもの、よくはわからないが、「あまねくゆきわたる」（均）の反對、つまり能力・性格に關して、偏りがある、むらがある。ということも、その原因の一つに數えられるであろう。そのことについては後にまた考えるとして、このような事があって後、何遜は母の死に遭って職を去り、喪があけると仁威廬陵王の記室として江州に下り、その地で間もなく亡くなっている。天監十七年518頃のことである。

一方、吳均は、中央から締め出され、さらに母の死に遭って意氣銷沈して都を落ちてゆく何遜とは對照的に、持ちまえのねばりを發揮して、悪くいってもともとばかりに、寒族を自分たちの仲間に入れようとしない貴族社會の厚い壁に向かって、性こりもなくぶつかってゆく。今度は均は方向をかえて、史書を編纂することによって名を擧げ[3]、文壇に參加しようと試みた。そうして彼は齊書を撰作するための資料として、「齊起居注」および「群臣行狀」の借用を高祖に申し込んだが、高祖は相手にしなかった。仕方なく均は、「齊春秋」を私撰して高祖に奉った。しかしその中で高祖のことを「齊の明帝の佐命」と、事實をありのままに記していたために、またもや高祖の氣嫌を損じてしまった。高祖は中書舍人の劉之遴に命じて、「齊春秋」の數十條（「梁書」では數條となっているが、今「南史」による。）について詰問させた。古體派の文人として博覽强記をうたわれた之遴にかかっては、いかに强氣で「好學俊才」の吳均も竟に返答に窮してしまい、その說明は支離滅裂なものとなり、苦心の作は有司に付されて燒却、その身は免職となってしまった。その頃のことであろうか、均の庇護者であった柳惲が世を去っている。

今度ばかりはさすがの吳均も、中央貴族社會と寒族とを隔てる壁の厚さを、身にしみて感じたことであろう。その後どれくらい免職になっていたのかはっきりしないが、後にはいくらか氣嫌のなおった高祖

に召し出されて、「通史」の編纂にたずさわっている。それは三皇に始まり齊代に訖る內容のものであったが、本紀、世家の草稿を作り畢り、列傳にとりかかっている最中、すなわち普通元年520に五十二歳で世を去った。

中央の文壇・政界に進出しようとして果されず、志を得ないままに世を去らねばならなかったその生涯は、何遜の場合とよく似ている。しかし自己の才能を認められないことに對する不滿、榮達の願いのかなえられない歎きは、何遜に比べて自己の才能に對する自負が强かっただけに、異った現われかたをしているように思われる。何遜が自己の中に深く沈潛してゆき、その詩に、望鄕の憂い、別離の歎き、生來の旅人としての孤獨を、「每に苦辛に病み、貧寒の氣に饒つ。」（「顏氏家訓」文章篇）と、都の論者に評されるまでに詠みこんだのに比べて、吳均は、外にその憤懣をぶちまける。というより、超越のポーズをとると言った方が當っているかも知れない。――自分はもともと宮仕えなどには向かない人間だ。「天子は既に賞する無く、公卿も竟に知らず。去り去りて歸りなんいざ、還りて傾けん　鸚鵡の杯。」（贈りて新林に別る）と、それを行動にうつすかどうかは別として、吳均はこのように詩に詠う。

兩者のこのような違いは、その生活環境によって育くまれた性格の違いに本づくものと考えてよかろう。沒落の過程にある中流貴族の一員として、沈みゆく夕陽の中に、そのうち沈んだ雰圍氣の中に育った何遜と、その傳記に父祖の名も記されないような「世々寒賤」の家に生まれ、その地位から脫け出そうとして、時には淺ましいまでに榮達にしがみつく吳均との差ということができようかと思う。

三

吳均の詩に見られる特徵をひと口に言えば、「遊俠」の精神に滿ち溢れている、ということであろう。時に知識人として、遊俠になりきれぬ所を見せながらも、遊俠的性格はその作品に色濃くあらわれている。いったい遊俠とは、「史記」遊俠列傳の司馬遷の言によれば、

遊俠の其の行いは、正義に軌わずと雖も、其の言は必ず信、其の行いは必ず果、已に諾すれば必ず誠をつくして、其の軀を愛まず。士の阨困に赴くや、既已に存亡死生にあり。而も其の能を矜らず、其の德を伐るを羞ず。蓋し亦た多とするに足る者あるなり。

というものである。この遊俠の氣風は、はやく戰國時代から世をおおっていたようである。孟嘗・春申・平原・信陵の四君の下に集まった人々の間に、遊俠の風は橫溢していたであろうし、また、君命を奉じ、また己を知ってくれる者に誠をつくすために、我が身を顧ることのなかった曹沫・專諸・予讓・聶政・荆軻のような人物もいた。

この氣風は漢代の社會においてもなお世間に漲っており、「史記」の遊俠列傳には、朱家・田仲・王公・劇孟・郭解、さらに樊仲子・趙王孫・高公子・郭公仲・鹵公孺・兒長卿・田君孺など、市井の遊俠の名をあげている。また班固の「西都」の賦には、漢初の長安における遊俠の樣子について次のように述べている。

鄕曲の豪擧、遊俠の雄、節は原・嘗を慕い、名は春・陵に亞がんとし、交を連ね衆を合して、其（長安）の中に騁騖す。

「豪擧」は遊俠と同じ意。「原嘗」は平原君と孟嘗君、「春陵」は春申君と信陵君のこと。

思うに創業の君である高祖も、またその創業をたすけた功臣の多く

も、もとはといえば市井の遊俠の徒である。漢代社會に遊俠の氣風が漲っていたのも無理からぬことといえよう。(4)

この遊俠の氣風は、漢以後、中央政府の體制が整ってくると、次第に壓迫されて薄らいでくる。例えば先にあげた班固の「西都」の賦で前漢の都長安の繁華なさまを示すためにあげられた「遊俠の雄」は、立場をかえて後漢の都洛陽を賛えることを意圖した、同じ作者による「東都」の賦においては、

遊俠の踰え侈りて、義を犯し禮に侵うは、同しく法度に履いて、翼々濟々たるに孰與れぞや。

のように、國家の法度を履み行い、翼々とつつしみ、服裝動作の禮にかなった人士と對比されて、「義を犯し禮に侵うもの」と貶されているのである。そうして六朝も齊梁になると、政府の弱體化にもかかわらず、その社會には遊俠の氣風は更に稀薄なものとなっているように見うけられる。

さてこのような遊俠の精神は、古くから主として樂府體の詩において詠われてきている。すなわち白馬篇、遊俠篇、輕薄篇、少年行、等々。しかし吳均の作品を見るに、樂府においてはもちろん、詩においても遊俠の精神は溢れており、それが吳均の作品の主要な特徴となっている。例えばその「贈りて新林に別る」詩においては、自分が本來「遊俠兒」であることを次のように詠う。

僕本幽幷兒　僕は本と幽幷の兒
抱劍事邊陲　劍を抱きて邊陲を事とす
風亂青絲絡　風は青絲の絡を亂し
霧染黃金羈　霧は黃金の羈を染む
天子既無賞　天子は既に賞する無く
公卿竟不知　公卿も竟に知らず
去去歸去來　去り去りて歸りなんいざ
還傾鸚鵡杯　還りて傾けん鸚鵡の杯
氣爲故交絕　氣は故交の爲に絕ち
心爲新知開　心は新知の爲に開かん
但令寸心是　但だ寸心をして是ならしめん
何須銅雀臺　何ぞ須いん　銅雀の臺

吳均は冒頭において、「僕は本もと幽幷の兒であり、劍を抱いて邊陲の地を舞臺に活躍する者である。」という。「幽幷」つまり幽州と幷州は、古えの燕・趙の地であり、曹植の「白馬篇」に、「白馬　金羈を飾り、連翩として西北に馳す。借問す　誰が家の子ぞ、幽幷の遊俠兒。少小にして鄉邑を去り、聲を沙漠の垂りに揚ぐ。……軀を措てて國難に赴き、死を視ること忽として歸するが如し。」とも詠われるように、その俗は氣節を尙び遊俠を事とする土地柄である。吳均は自分が遊俠兒であることを、ここに表明する。これまで自分は心ならずも宮仕えをしてきたが、「天子は私の功績を賞めようともしないし、朝廷の公卿たちも結局は私を認めてはくれない。」もはやここに居ても仕方がない。「早く歸ろう、還って鸚鵡の杯でも傾けるとしよう。」そうしてこれからは「私を理解してくれる者のために心を盡そう。」悔いることは何もない。「但だ心に納得のいくように生きて行こう。世の榮達など欲しくもない。」と、意氣高らかに詠いあげる。

この詩からうかがえる吳均の氣持ちは、要するに、自分は本もと遊俠の兒であり、宮仕えには不向きな人間である。天子や貴族たちが自分を認めてくれないからには、自分の世界に歸って心のままに生きよう、ということのようである。

呉均の遊俠的意識は、また「蕭新浦（子雲）に答う」詩にも、よく表われている。

僕本二陵徒　僕は本と二陵の徒
英豪多久要　英豪多く久しく要む
角觝良家兒　良家の兒と角觝し
期門惡年少　惡年少と門に期す
……

「二陵」とは長安の南郊にある杜陵（漢の宣帝の陵）と霸陵（文帝の陵）のことかと思う。この二陵と、長安北部にある五陵（高帝の長陵、惠帝の安陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵）の地は、漢が天下を平定して長安に都した時、諸侯の力を弱めるために、州郡の豪傑や五都の貨殖などを遷した所である。「漢書」地理志には、以上のようなことを述べた後に「是の故に、五方のひと雜厝り、風俗は不純なり。其の世家は則ち禮文を好み、富人は則ち商賈にて利を爲し、豪傑は則ち遊俠　通姦す。」と記す。要するに「二陵」は、あまり風氣の良い所ではなかったらしい。「僕は本と二陵の徒」とは、したがって「僕は本と遊俠の徒」と同じ意味に受けとってもよさそうである。「角觝」は、兩方に分れて力や技藝射御などの腕を競う遊び。「良家兒」については「漢書」地理志に「漢の興るや、六郡（隴西・天水・安定・北地・上郡・西河）の良家の子は、選ばれて羽林、期門に給られ、材力を以て官と爲る。名將　多く焉に出ず。」とある。つまり「戎狄に迫近り、戰備を修習し、氣力を高上し、射獵を以て先と爲す」（「漢書」地理志）六郡の良家の子弟を都に集めて監督し、惡事を働かぬようにさせたのである。「期門」は既に述べた「漢書」地理志に記すように、良家の子が配屬される役所であるが、その起りについては「漢書」東方朔傳に「武帝　微行して、常に用て酎を飲む。八九月の中、侍中　常侍　武騎、および待詔の隴西・北地の良家の子の能く騎射する者と、諸殿の門に期す。故に期門の號あり。」のように記す。つまり「良家子」と「惡年少」とは、指す對象は同じである。要するにこの詩では、「僕は本と二陵の徒であり、世の英雄豪傑たちに久しく囑望されていた者たちの一人である。都においては隴西や北地の良家の子と角觝し、惡年少たちと宮中の門で待ちあわせをした。……」と、かつてそのような經驗があったのかも知れない呉均は、都の惡年少たちとの遊俠的な交りについて詠う。

もう一例、これも「僕は本と云云」で始まる「詠懷」の詩を見てみよう。

僕本報恩人　僕は本と報恩の人
走馬救東秦　馬を走らせて東秦を救う
黃龍暗迢遞　黃龍は暗くして迢遞かに
青泥寒苦辛　青泥は寒くして苦辛す
野戰劍鋒盡　野戰して劍鋒は盡き
攻城才智貧　城を攻めては才智貧し
唯餘一死在　唯だ餘して一死あるのみ
留持贈主人　留め持して主人に贈らん

「青泥」は陝西省藍田縣にある城の名。東晉の劉裕が大いに後秦の兵を破った所である。「黃龍」も城の名のようである。「東秦を救う」とは、したがって、形勢の悪い方に味方することを意味する。

ところで「報恩」とは、極めて遊俠的なテーマである。というのは「報恩」に最も大きな價値を認めるのは遊俠であったから。したがって「僕は本と報恩の人」と詠いおこされるこの詩は、やはり遊俠の氣

に滿ちたものということができよう。

古來、樂府は、遊俠をその主要なテーマの一つとして詠う習慣を持っているが、詩にそれをとりあげて詠う例は少いように思う。しかし吳均は、その詩で盛んに遊俠を詠う。どうして吳均は、それほどまでに遊俠を好むのであろうか。或は彼の育った環境が、「蕭新浦に答う」詩に詠われるように遊俠的であったのかもしれない。或は「世〻寒賤」な家柄でありながら中央貴族社會に加わろうとして、手ひどくはじき返されるたびに湧き起った、貴族たちに對する反撥とも考えられよう。しかしその結論は後にまわして、吳均の詩の遊俠性について更に言うならば、「報恩」については「江主簿、屯騎に別るるに酬ゆ」「邊城將」「使いを廬陵に奉ず」などの詩において詠われ、また「報恩」「遊俠」と深い關係にある「劍」と「馬」とは、「蕭新浦・王洗馬に酬ゆ」「郭臨丞に酬ゆ」「贈りて新林に別る」「周興嗣に贈る」「邊城將」「寶劍」などの詩において、しばしば詠われる。

このような「報恩」「劍」「馬」などは、遊俠兒吳均の象徴とみることができよう。そうしてそれは、彼の詩に、遊俠華やかなりし時代の心意氣と悲壯感、つまり吳均體の特徴の一つである「古氣」を添えるものであった。

このように、遊俠に對する憧れ、遊俠的精神に溢れる吳均は、その感情のおもむくままに、「自分は本もと遊俠兒であり、宮仕えには不向きな人間である。」また「自分の眞價を認めてくれないからには、さっさと邊陲の地に歸り心のままに生きよう。」と詠うわけであるが、このような心情の現われている作品には、まだ次のようなものがある。

壽陽還與新故別（壽陽より還らんとして新故と別る）

但願千丈松　但だ願う　千丈の松となりて
結景雲之峯　景を雲の峯に結ばんと
山高日華早　山高くして日華は早く
枝多風彩重　枝多くして風彩は重し
我還愛芳杜　我は還りて芳杜を愛さん
君住揖驪龍　君は住まりて驪龍に揖せ

「千丈の松となって、雲のわく峯の上に影を結びたいものと願っていたのに、山が高ければ日の光はうすく、枝が多ければ風當りは強い。私は家に歸って、芳わしい杜でも愛することにしよう。君はここに止まって驪龍、つまり主君に揖禮でもしていたまえ。」

贈周興嗣（周興嗣に贈る）

孺子賤而貧　孺子は賤にして貧
且非席上珍　且つ席上の珍に非ず
唯安萊蕪甑　唯だ萊蕪の甑に安んじ
兼慕林宗巾　兼ねて林宗の巾を慕わん
……

ここでは、「賤にして貧、どうみても席上の珍とはなれない自分は、ただ萊蕪の甑に安んじて、後漢の郭林宗の清潔な生き方を見ならいたい。」と詠う。

また、

甘泉無竹花　甘泉には竹の花の無ければ
鵷鷊欲還海　鵷鷊は海に還らんと欲す
欲還天台峯　天台の峯に還らんと欲す
不狎甘泉宮　甘泉宮には狎れず

（周承の未だ還らざれば、重ねて贈る）

（王謙に別る）

のようにも詠う。

以上のように、呉均は、「自分は本もとこの都には、また朝廷には、縁のない人間であるから、早く自分の世界に歸ろう。」というのであるが、しかしそこには、遊俠の世界に歸りたいという願いのほかに、隱遁の願いも現われている。遊俠の世界に生きることも隱遁も、ともに官界から身を引くことではあるが、遊俠が市井の輩の世界であるのに對して、隱遁は知識人のとる態度であり、教養ある人々の世界に屬する事柄である。つまり隱遁への願いは、遊俠の世界に憧れる野性的な呉均の、知識人としての一面を見せたものであろう。

隱遁を願う作を更にあげれば次のようなものがある。

發湘州贈親故別（湘州を發せんとして親故に贈りて別る）

雲生曉靄靄　雲は生じて曉に靄靄たり
花落夜霏霏　花は落ちて夜に霏霏たり
問余何意別　余に問う　何の意ありて別ると
答言倦遊歸　答えて言う　遊に倦みて歸るなりと
徒勞易水布　徒らに勞す易水の布
空負洛陽衣　空しく負う洛陽の衣
懷金無人別　金を懷くも人の別つ無く
抱玉遂成非　玉を抱きて遂に非を成す
安得久留滯　安んぞ久しく留滯するを得ん
商山饒白薇　商山には白薇饒し

「金を懷くも人の別つ無く、玉を抱きて遂に非を成す。」誰も私の能力を認めてはくれず、かえってその才能があだとなって非難を受けるしまつ。「安んぞ久しく留滯するを得ん、商山には白薇饒し。」いつまでもここにぐずぐずしてはいられない。商山には今や白薇が咲きこぼれていることだろう。商山は秦漢の際に四皓（東園公・綺里季・夏黄公・甪里先生）が隱れたところである。ここでは呉均は、邊陲遊俠の地に歸るのではなく、商山に隱遁したいという。そこには遊俠兒としての呉均ではなく、志が得られなければ隱遁を願う、世の常の知識人としての呉均が顔をのぞかせている。

しかしながら呉均は、遊俠の世界に歸ることも、隱遁もしなかった。中央の文壇・政界から締め出されるたびに、一時的にはそのような決心をしたようであるが、幾代もの寒賤の地位から脱け出そうとする執念は、そのつど、その決心をおしつつみ鈍らせてしまったようである。何時のことか明らかでないが、その「顧章に與うる」書によれば、隱遁らしいことをしてはいる。すなわち、

僕は去月、病いと謝りて、還りて薜蘿を覓む。梅溪の西に石門山なるものあり。森き壁は霞と爭い、孤峰は日を限る。幽岫は雲を含み、深溪は翠を蓄う。蟬は吟き鶴は唳き、水は響き猿は啼き、英々として相い雜り、綿々として韻を成す。既に素より幽居を重んずれば、遂に宇を其の上に葺る。幸いに菊華に富み、偏えに竹の實饒し。山谷の資る所、斯に於て已に弁る。仁智の樂しむ所、豈に徒語ならんや。

しかしながらそれは、一時的なものであったように、すでに述べたその生涯からは見うけられる。官職に對する欲望の強い呉均にとって、いつまでも石門山に籠っていることは不可能なことであったろう。出世の機會は何時おとづれてくるかわからないのである。

官界に對する欲望の斷ち切れないために、遊俠の世界、その心意氣に憧れながらも、その感情の高まりに身を任せることもできず、また

本格的な隠遁にふみ切ることもできないでいる吳均は、その落ちつかぬどうしようもない氣持ちを、いったいどのように處理したのであろうか。

思うに中國の知識人たちは、このような場合、つまり志が遂げられず挫折感にうちひしがれた時、そのやり場のない氣持ちを解消し薄める方法を、それぞれに心得ていたようである。滿たされない心を詩に表現するということそのものが、鬱結した氣持ちをはらすことにもなったのであるが、それは別にして、或る者は山水に逃れ、さらに老莊の思想に沒入し、或る者は全てを天命と思いあきらめ、また時代にその責任をかぶせた。そうしてその處理の過程を、また一應の結論を、詩に託して表現した。何遜の場合は、不遇の原因を、家柄の惡さと自己の拙い世渡りの能力のためと思いあきらめ、自然山水に、道家の思想に逃避しようとしたが、それだけではなお氣持ちを處理しきることはできなかった。その壓えきれないものが、當時の論者に「每に苦辛に病み、貧寒の氣に饒つ。」（「顏氏家訓」文章篇）と評されるものとなって其の詩に滲み出たのであろうが、では吳均の場合、身の不遇によってひきおこされた遣りようのない氣持ち、遊俠に憧れ、隱遁を願い、それでもなお滿たされない氣持ちはどのように處理されたのであろうか。

その處理の一方法は、同じような境遇にあった古人を思い起し、また現在の不遇な友人たちのことを思って、自分だけが不遇な狀態にあるのではないということを、自分に言いきかせ納得させることであった。

まず自分の不遇を慰めてくれる古人としては、司馬相如、揚雄、桓譚、馮衍といった漢の著名人たちがとりあげられる。

敬通才如此　君山學復深
明哲遂無賞　文華空見沈

（湘州を發たんとし親故に贈りて別る）

敬通　才は此の如く
君山　學は復た深し
明哲も遂に賞せらるる無く
文華は空しく沈めらる

故人揚子雲
校書麟閣下
寂寞少交遊
紛綸富文雅

（蘭臺に入りて王治書僧孺に贈る）

故人　揚子雲
麟閣の下に校書す
寂寞として交遊少く
紛綸として文雅に富む

元淑勢位卑
長卿宦情寡
二頃且營田
三錢聊飲馬

（詠懷）

元淑は勢位卑く
長卿は宦情寡し
二頃に且く田を營み
三錢もて聊か馬に飲う

子雲好飲酒
家在成都縣
製賦已百篇
彈琴復千轉
敬通不富豪
相如本貧賤
共作失職人
包山一相見

（周散騎興嗣に贈る）

子雲は飲酒を好み
家は成都縣に在り
賦を製すること已に百篇
琴を彈ずること復た千轉
敬通は富豪にあらず
相如は本より貧賤なり
共に失職の人と作りて
包山に一たび相い見る

このように、拔群の能力を持つ古人も多く不遇であった。そう考え

ることによって、呉均の心はいささか安らいだのであろうが、中でも司馬相如は、彼にとって大きな心の支えであったらしく、詩の中で自分を「相如」とよぶこともある。

江南霜雪重　江南に霜雪は重く
相如衣服單　相如　衣服は單なり
……
且當對樽酒　且く當に樽酒に對うべし
朱絃永夜彈　朱絃　永き夜に彈かん
（周參軍に酬う）

また「行路難」では、趙の邯鄲から上京してきた遊俠少年の言として詠われる、次のような例もある。

……
復聞梁王好學問　復た梁王の學問を好むと聞きて
輕棄劍客如埃塵　劍客を輕棄すること埃塵の如し
吾丘壽王始得意　吾丘壽王は始めて意を得
司馬相如適被申　司馬相如は適たま申かる
大才大辯尚如此　大才大辯すら尚お此の如し
何況我輩輕薄人　何ぞ況んや我輩のごとき輕薄の人をや

ここに登場する遊俠少年は、恐らく呉均自身のことであったろう。

呉均が相如を慕うのは、相如が遊俠的な要素を多分に持っている文人であったからと思われる。若い時から擊劍を好み、後に長安に出て景帝に武官として仕えた相如。辭賦を好まぬ景帝にあきたらず、官を辭して文學を愛好する梁王の下に行ってその賓客となった行動力。梁王の死後、故郷の成都に歸り、成都の富豪卓王孫の娘文君とくりひろげた奔放な戀愛と生活……。このような、いわゆる「宦情」を懷かぬ相如の、市井の遊俠に類する行動。その文學の才と、それを驅使しての活躍に對して、呉均が憧れを懷いたのも無理からぬことであった。

こうして不遇であった古人を思うことによって、自分が宮仕えに不向きであり、さっさと宮仕えを止めて、わが思いのままに生きようという心の支えにしていたようであるが、また不遇な境遇にある友人たちについても、次のように思いを馳せる。

石渠閒無人　石渠は閒として人なし
子雲今何在　子雲　今何くにか在る
顧望獨懷憂　顧望して獨り憂いを懷く
銜杯竟誰待　杯を銜みて竟に誰をか待たん
散雪逐吹寒　散雪は吹寒を逐い
蓬姿浮霜采　蓬姿には霜采浮かぶ
甘泉無竹花　甘泉には竹花なければ
鵷鷁欲還海　鵷鷁は海に還らんと欲す
（周承の未だ還らざれば、重ねて贈る）

不遇な友人の一人であったと思われる周承という人物を揚子雲になぞらえ、會って互いに心の中を語り慰めあいたいものと、幾度か訪れるけれども、なかなか會えない寂しさを詠う。周承に關しては此のほか「周承に詣るも値えず、因りて此の詩を贈る」「遙かに周承に贈る」という作があるが、いずれも、自分の能力を當路の人たちに認められない歎きを述べている。

また「郭臨丞」という人物に對しても、次のように言う。

聞君立名義　君の　名義を立つるを聞く
我亦倦晨征　我も亦た晨征に倦む
馬在城上蹀　馬は城上に在りて蹀き

劍自腰中鳴　劍は自づから腰中に鳴る
白日遼川暗　白日は遼川に暗く
黃塵隴坻驚　黃塵は隴坻に驚る
願君但銜酒　願わくは君　但だ酒を銜め
深知有素誠　深く知る　素誠の有るを
（郭臨丞に酬う）

大義名分を貫いて、それがために免職にでもなったらしい郭臨丞に同情して、「私も亦た勤務に倦んでしまいました。……どうか酒でも飲んでいらっしゃい、あなたの眞心は私がよくよく知っておりますから。」と詠う。

そうして「友を傷む」詩には、

可憐桂樹枝　憐れむべし桂樹の枝
懷芳君不知　芳を懷くも君は知らず
摧折寒山裏　寒山の裏に摧け折れ
遂死無人窺　遂に死して人の窺う無し

と、眞價を知られないままに摧折し死んでしまった友を傷んでいる。吳均の場合、友を傷むことは自分を傷むことであり、同時に自分を慰めることでもあった。

しかし、このように、不遇であった古人をしのび、不遇である友を思うことによって、吳均の歎きは癒やされたかというと、それは疑問である。自分と同じように不遇であった古人、不遇である友のことを思う時、確かに一時的には慰められたに違いないが、しかし次の瞬間には、復び以前にも增して、志を得られぬことに對する歎きと憤懣が、心中に湧きおこってきたように思われる。榮達に對する執念を燃やし續けたその生涯によって、そのことは推察されよう。己を知ってくれる人のいない歎き、榮達への道の閉ざされていることに對する歎き——遊俠の世界へ歸ろう、隱遁してしまおうという、中央貴族社會に對する反發——古人も不遇だった、今も友人たちは不遇だ、という自慰。ここまで來ると、しかし俺は違うんだ、とばかりに、貴族社會に對して卷きかえしを計り、その度に手ひどい打擊を受けて、歎きと憤懣のためにどうしようもなくなり、また自分の世界に歸ることを考える。吳均の生涯はこの繰り返しであったように思われる。したがってその詩も、榮達に對する執念によってひきおこされる歎き、憤懣、反發、自慰、そうして復び榮達への願い——、この繰り返しの表現であって、そこには、諦めにもとづく安らぎ、というものは見られない。したがって吳均の場合、不遇の歎きは、何遜のように內にこもる憂愁とはならなかった。

ただ、梁初天監末における四十、五十代の吳均には、度かさなる挫折のために、齊末二十代のころの、榮達に對するひたむきな情熱はいささか影をひそめ、それに代って、深い歎きと孤獨の寂しさが心を占めることが多くなってきた、ということは言えよう。しかし、自己を不遇に陷しいれたもの、すなわち、どんなに能力があろうと、寒族を受けいれようとしない貴族社會の不合理性に對する憤りは、その胸の底にますます激しく燃えさかっているようである。吳均はその詩の中で、しばしば「孤松」について詠う。巖上に亭々とそびえ立つ、それ故に他の樹木に比べて、風雪に虐げられることの多い「孤松」に、また風雪にあくまで抵抗する「孤松」に、そのような己の姿を見たのであろうか。

ところで「孤松」といえば、吳均は、齊末における、つまり彼の二十代の作である「王桂陽に贈る」詩において、「松の生じて數寸の時、

遂に草の沒する所と爲る。未だ籠雲の心を見わさず、誰か知らん負霜の骨。弱き幹は摧殘わるべく、纖き莖は凌忽られ易し。何ぞ當に數千尺となりて、君の爲に明月を覆うべき。」と詠じ、またこれも齊末の作と思われる「壽陽より還らんとして親故と別る」詩において、「但だ願う　千丈の松となりて、景を雲の峯に結ばんことを。」と詠っているところを見ると、すでに少い頃から、吹きすさぶ風の中に孤り立つ數千尺の松に、將來の己の姿を思い描いていたようである。このように「千丈の松」「數千尺」の松に、將來の自分の姿を思う吳均の心中を想像するに、最初から孤立獨行の生涯を覺悟していたようであるが、これはやはり、「世々寒賤」なる家柄の出身として、誰にも賴ることなく獨りで生きて行かねばならぬことを、早くから身にしみて知らされていたからに違いない。以來吳均は、世の權威、不合理に屈することなく、自己を貫き通そうとして努力するのであるが、しかし結局は、その「孤松」も、

根爲石所蟠　根は石の蟠る所と爲り
枝爲風所碎　枝は風の碎く所と爲る
賴我有貞心　我に貞しき心あるを賴るも
終凌細草輩　終に細草の輩に凌がる
（慈姥磯の石上の松を詠ず）

その根を石にかためられ、枝を風に碎かれて、己の貞心だけを賴りに生き拔いてきた松も、終に細草の輩―世の俗人ども―に凌がれてしまった、このような慈姥磯の石上の松に、吳均は自らの姿を見るようになる。それは寒賤なる家柄の出身にもかかわらず、貴族たちによって固められた中央文壇・政界に參加しようと企て、無殘に破れた吳均自身の姿であったろう。

その詩にはまた、寒風に吹き掃われる喬木、暗雲にとざされる高樹が詠われる。

白日隱城樓　白日は城樓に隱れ
勁風掃寒木　勁き風は寒木を掃う
（柳惲と相い贈答す）

秋月照層嶺　秋月は層き嶺を照らし
寒風掃高木　寒風は高木を掃う
（柳惲に答う）

沈雲隱高樹　沈雲は高樹を隱し
細雨減層巒　細雨は層き巒を減す
（周參軍に酬う）

冬の夕暮に風に吹き掃われている寒木。秋の月に照らされた層嶺で寒風に吹きさらされている高木。また沈雲につつまれた層巒の高樹。これら喬木の背後には、相知の人を求められぬまま、志の得られぬまま、獨り生きて行かねばならぬ孤獨な吳均の姿を見ることができる。

「遙かに周承に贈る」詩には、その氣持ちを、

練練波中月　練練たり波中の月
亭亭雲上枝　亭亭たり雲上の枝
高岑蔽人者　高き岑にて人を蔽う者は
無處得相知　處として相知を得る無し

のようにも詠っている。

このような吳均の孤獨は、遊俠の獨行性に通ずる。信義を重んじて獨り己を貫こうとする遊俠の心は、常に孤獨であった。「世々寒賤」の家に生まれた吳均は、官界においては常に孤獨な存在であった。その寂しさ心細さを抑えて、ひたすら榮達を目指す吳均は、そのような

己の姿に、誰にも心を明かすことなく、したがって人に知られることもなく獨行する遊俠を見たのではなかろうか。

志が得られない時には、遊俠の世界へ歸ろうと決心し、また隱遁を計畫する。しかしそれは、あくまでも一時的なものであって彼の本心ではなかった。彼はあくまでも「世〻寒賤」といわれる家柄から、貴族社會への飛躍を志した。しかし貴族社會の壁は厚く、吳均は志を得られぬまま、風雪に耐えて峯にそびえる孤松のように、また誰にも理解されることなく獨行する遊俠のように、貴族社會の周邊に生きつづけなければならなかったのである。その詩はこのような吳均の、つまり榮達への執念を燃やしつづけた吳均の、心の記錄ということができるであろう。

註(1)「梁の文學集團と個人」㈠—何遜について—（廣大敎育學部付屬高校國語科紀要一號）

(2)「南史」「梁書」の吳均傳に、「均の文體は、清拔にして古氣あり。好事者　或は之を學ね、謂いて吳均體と爲す。」という。吳均より少し後の紀少瑜（南史七二）に、「吳均體に擬す、敎に應ず」と題する詩が殘っている。

(3)「南史」吳均傳に曰う「是れより先、均は將に史を著わして以て自から名をあげんとす。齊書を撰せんと欲して、齊起居注および群臣行狀を借らんことを求む。」

(4)漢代社會の遊俠の風については、吉川幸次郎博士が「司馬相如について」（全集卷六）の中で述べておられる。